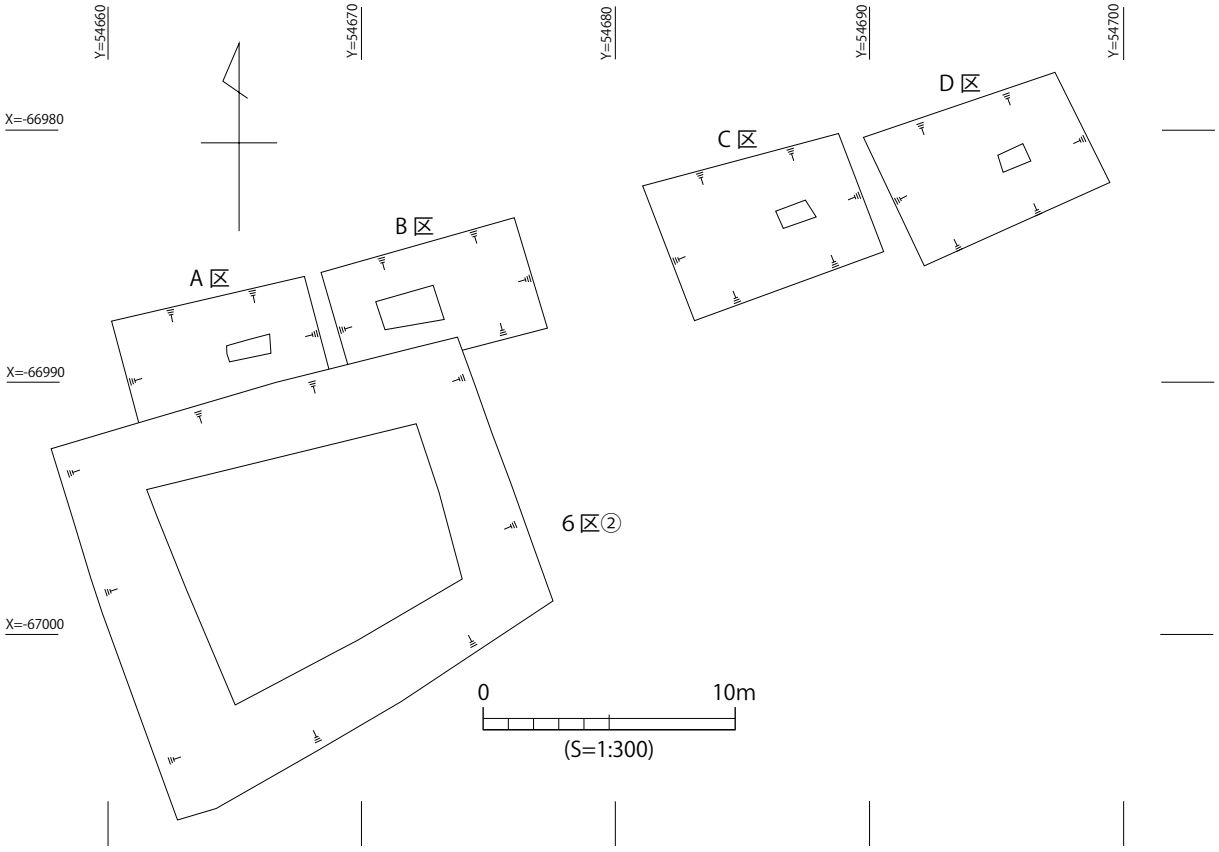
第２節　６区②の調査

６区②は 2006 年 10 月 12 日から調査を開始した。調査に際しては、重機が通る部分を先行して調査し、その部分を４つの調査区に分けて、西から A ～ D 区と呼称した。この A ～ D 区の調査により、土層の堆積状況や遺物包含層までの深さを把握することができた。11 月 13 日までこの部分の調査を行い、A 区と B 区の南側の部分を「6 区②」として 11 月 16 日から開始した。耕作土などの層を重機で掘削した後、「オモカス」層以下を人力で掘削した。土坑などの遺構を検出した後、下層の掘削を行っていたが、雨により壁面が崩落したため、12 月 12 日で調査を終了した。調査面積は A ～ D 区が約 130㎡、6 区②が約 230㎡である。

１．土層の堆積状況

調査前の標高は 4.2 ～ 4.5 m であり、元々は水田であった部分である。標高 3.6 m付近には数㎝の厚さではあるが灰白色の砂層がどの調査区でも確認することができた。表土下の約 1 mはすべて I 層として 1 ～ 16 層に細別した。標高 3.2 m付近から堆積する腐植土（いわゆる「オモカス」層）を II 層として大別した。暗褐色系の色をしており、5 層に細別した。III 層は古代の水田耕作土の可能性があるが、平面での水田遺構の確認はできなかった。遺物包含層である IV 層は標高 3.0 m付近で確認した。B 区～ D 区では IV 層がやや低いようであり、IV 層は北東へ向かって低く傾斜している可能性がある。北西側の A 区では黒褐色や暗褐色であったが、南側や東側ではやや明るく灰色であった。9 層に細別した。6 区の他の調査区では､IV 層の下にシルト層が堆積しているが、本調査区では粘性の強い層が堆積していたので、V' 層として大別した。調査区によっては下層の堆積状況を確認するため、IV 層より 1 m近く掘り下げた部分がある。15 層に細別した。C 区や D



第 5 図　　6 区②調査区配置図

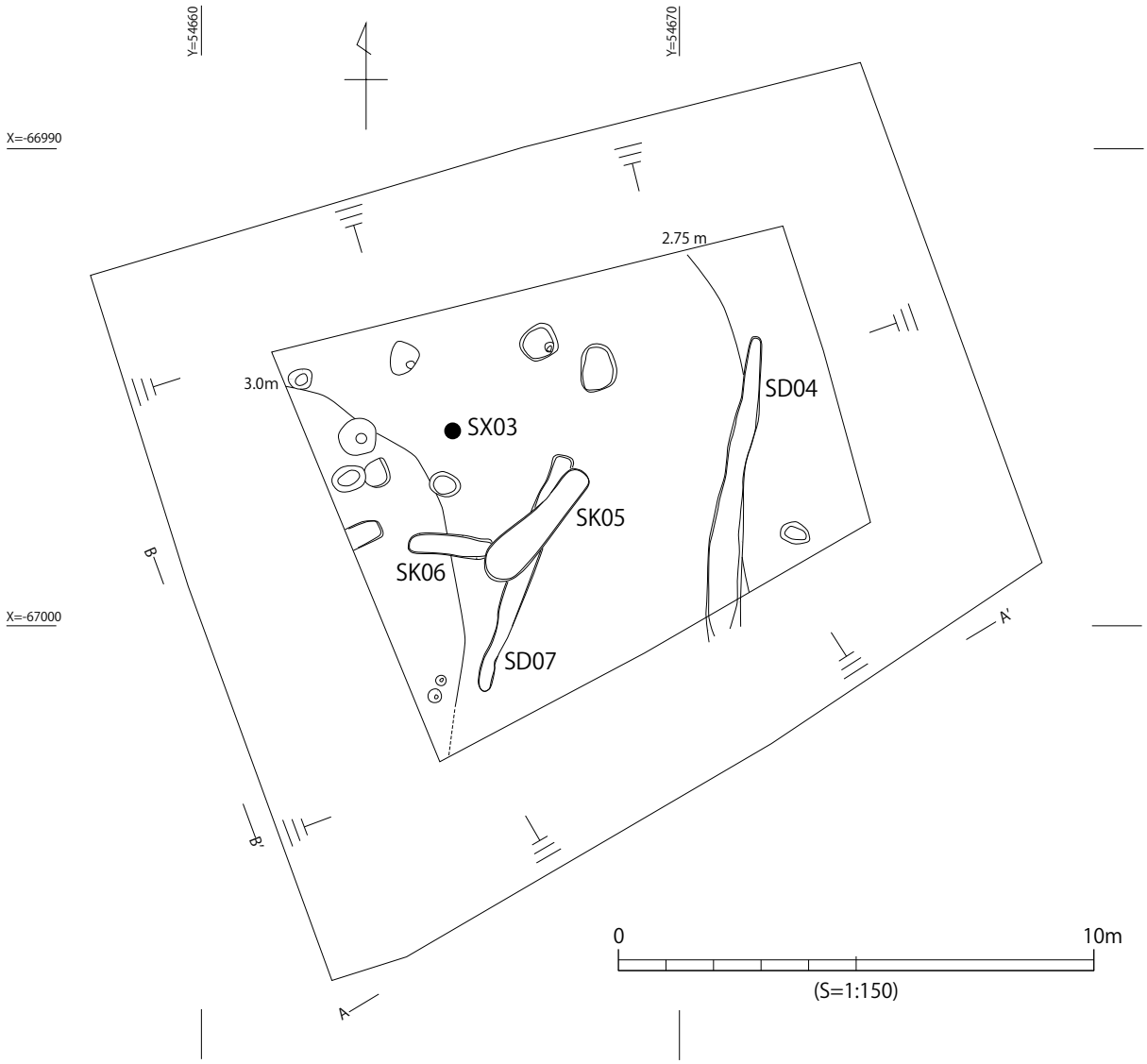
区で標高 1.0 m付近まで掘り下げたが、6 区⑤から西側で確認される縄文時代から弥生時代後期の土器を含む砂礫層は、確認できなかった。

2．遺構

6 区②で検出した遺構は、いずれも IV-8 層上面で検出した。IV-8 層上面は、西側が標高約 3.0 mでやや高く、東へ向かって低くなっている。湧水がありぬかるむ状態で、遺構の検出には困難を感じる部分があった。6 区②では土器を逆位に置いた遺構 1 基（SX03）、土坑 2 基（SK05、06）、溝 2 条（SD04、07）を検出した。

SX03（第 11 図） 調査区の北西側、O13 に位置する。IV-8 層の精査中、標高約 2.9 m付近で土器の破片が見つかったので、土器の周囲を清掃すると小型の甕が逆位で出土した。周囲を精査したが、土坑などの遺構は確認できなかった。土器は破片になっていたが、口縁部から胴部上半にかけて接合した（第 13 図 1）。遺構の時期は弥生後期前半代と考えられる。

SD04（第 11 図） 調査区の東側、O13 に位置する。IV-8 層を掘り込んで作られている。南北に延びる溝状の遺構である。長さ 6.2 m以上、幅約 0.7 mである。深さは約 7cm と浅いが、上面が削平された可能性もある。埋土は 1 層である。土器が出土したが細片が多く、図示できるものは 2



第 6 図　6 区②遺構平面図

点であった（第 13 図 2、3）。遺構の時期は弥生後期後葉と考えられる。

SK05（第 11 図） 調査区の中央、O13 に位置する。SD07 に後出し、SD07 を切る。長さ約 3.0 m、幅約 0.9 m、深さ約 0.1 mである。平面形は隅丸長方形である。埋土は 1 層である。土器は細片であり、図示できるものはなかった。遺構の時期は弥生後期と考えられる。

SK06（第 12 図） 調査区の西側、O13 に位置する。長さ 1.8 m、幅 0.5 m、深さ 0.2 mである。平面形は隅丸長方形である。埋土は 1 層である。土器は細片であり、図示できるものはなかった。遺構の時期は弥生後期と考えられる。

SD07（第 12 図） 調査区の西側、O13 から N13 にかけて位置する。SK05 に先行し、SK05 に切られる。長さ 5.2 m、幅 0.5 m、深さ 0.1 mである。埋土は 1 層である。土器は細片であり、図示できるものはなかった。遺構の時期は弥生後期と考えられる。

３．出土遺物

SX03（第 13 図 1） 口径約 14㎝のやや小形の甕である。口縁を下にして出土したため、胴部下半を欠く。口縁部は波を打つような形で、直線的でない。口縁部の幅は短く、ヨコナデで調整しており、凹線文などの文様はない。やや胴の張る器形である。内面はヘラケズリの後、丁寧にナデ消している。文様がないので時期を特定するのは難しいが、後期前半代と考えられる。

SD04（第 13 図２・３） 図示できるのは 2 点である。2 は壺または甕の底部である。外面は丁寧なナデで調整している。3 は甕の肩部である。貝殻による押引文を 5 段以上配置する。押引の方向を交互に替えている。出雲・隠岐 V-3 様式（以下「出雲・隠岐は省略」）と考えられる。

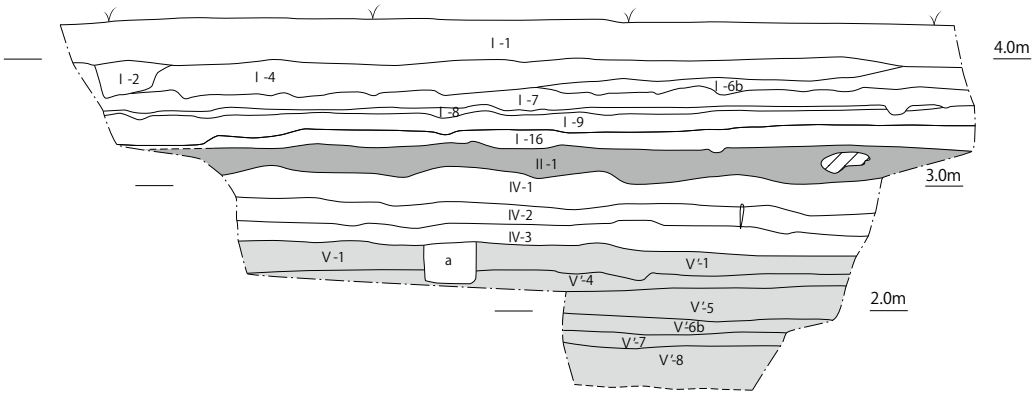
A 区（第 14 図１～５） 古式土師器と須恵器を図示した。1 は壺である。口縁部は直線的に伸び、口縁部下の稜は突出しない。2 は甕である。口縁部は曲線的に伸びる。3 は高坏である。内外をヘラミガキで調整し、特に外面は細かなヘラミガキを横方向に施す。1 ～ 3 は草田 6 期と考えられる。4 は直口の壺と考えられる。肩部に櫛描波状文がある。5 は須恵器の坏身である。口縁端部に面が

第 3 表　6 区②土層一覧

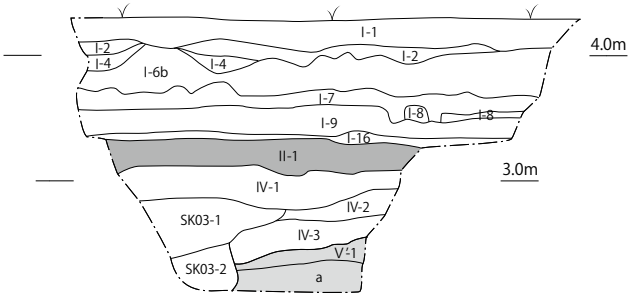
I-1	黄褐色土 10YR5/6
I-2	明黄褐色砂礫 10YR6/8
I-3	青灰色砂 5B5/1
I-4	にぶい黄橙色土 10YR7/4
I-5	黄橙色砂 10YR7/8
I-6a	緑灰色砂 10GY5/1
I-6b	緑灰色土 7.5GY6/1
I-7	褐灰色土 10YR4/1
I-8	灰白色砂 10YR8/2
I-9	オリーブ黄色土 5Y6/4
I-10	灰オリーブ色土 7.5Y5/2
I-11	オリーブ灰色土 5GY6/1
I-12	緑灰色土 5G6/1
I-13	黄灰色土 2.5Y5/1
I-14	灰色土 5Y5/1：水田？
I-15	灰オリーブ褐色 2.5Y3/3：水田
I-16	灰黄褐色土 10YR6/2：水田
II-1	灰黄褐色土 10YR4/2：オモカス
II-2	黄灰色土 2.5Y4/1：オモカス
II-3	黒褐色土 10YR3/1：オモカス
II-4	灰オリーブ色土 5Y4/2: オモカス
II-5	オリーブ黒色 5Y3/2: オモカス
III	暗灰黄色土 2.5Y5/2 灰、オリーブ色土 5Y5/2：水田

IV-1	黒褐色土 10YR3/2
IV-2	暗褐色土 10YR3/3
IV-3	灰色土 10YR5/1
IV-4	褐灰色土 10YR5/1
IV-5	黄灰色土 2.5Y5/1
IV-6	灰色土 5Y4/1
IV-7	黒褐色土 2.5Y3/1
IV-8	灰色土 5Y5/1
IV-9	灰オリーブ色土 5Y5/2
V'-1	灰色粘土 5Y5/1
V'-2	灰色土 5Y5/1
V'-3	灰色粘土 5Y5/1
V'-4	灰オリーブ砂 5Y6/2
V'-5	オリーブ黄色粘土 5Y3/1
V'-6	灰色粘土 5Y3/1
V'-7	灰白色砂・土 5Y7/1
V'-8	灰色粘土 7.5Y4/1
V'-9	灰白色土 5Y6/1
V'-10	オリーブ黒色粘土 5Y3/1
V'-11	灰色粘土 10Y6/1
V'-12	灰色土 5Y4/1
V'-13	オリーブ灰色砂 2.5GY6/1
V'-14	黒褐色粘土 10YR3/1
V'-15	灰オリーブ色粘土 5Y6/2

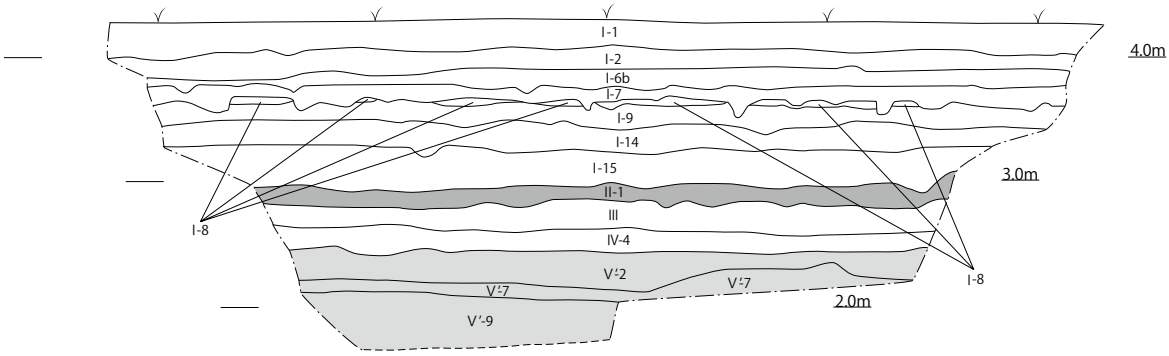
	遺構埋土
a	黄灰色土 2.5Y5/1：埋土
b	オリーブ黒色土 7.5Y3/2
c	オリーブ黒色粘土 10Y3/2
d	オリーブ黒色土 5Y3/1
e	灰色土 5Y4/1
f	灰色土 5Y6/1：SD04 埋土
g	黄灰色土 2.5YR5/1
h	褐灰色土 10YR4/1



A区北壁



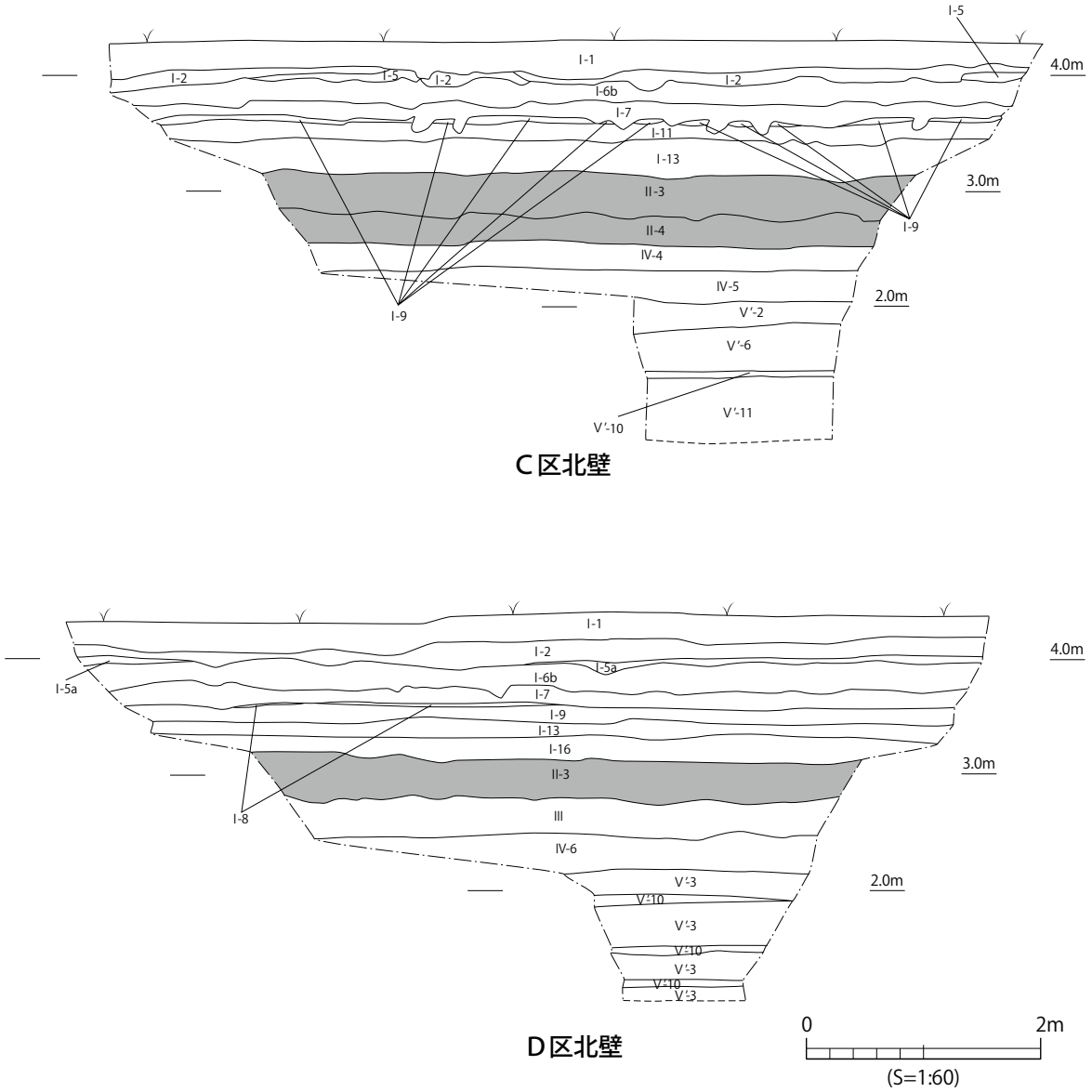
A区西壁



B区北壁

0 2m
(S=1:60)

第7図　6区② A・B区土層図

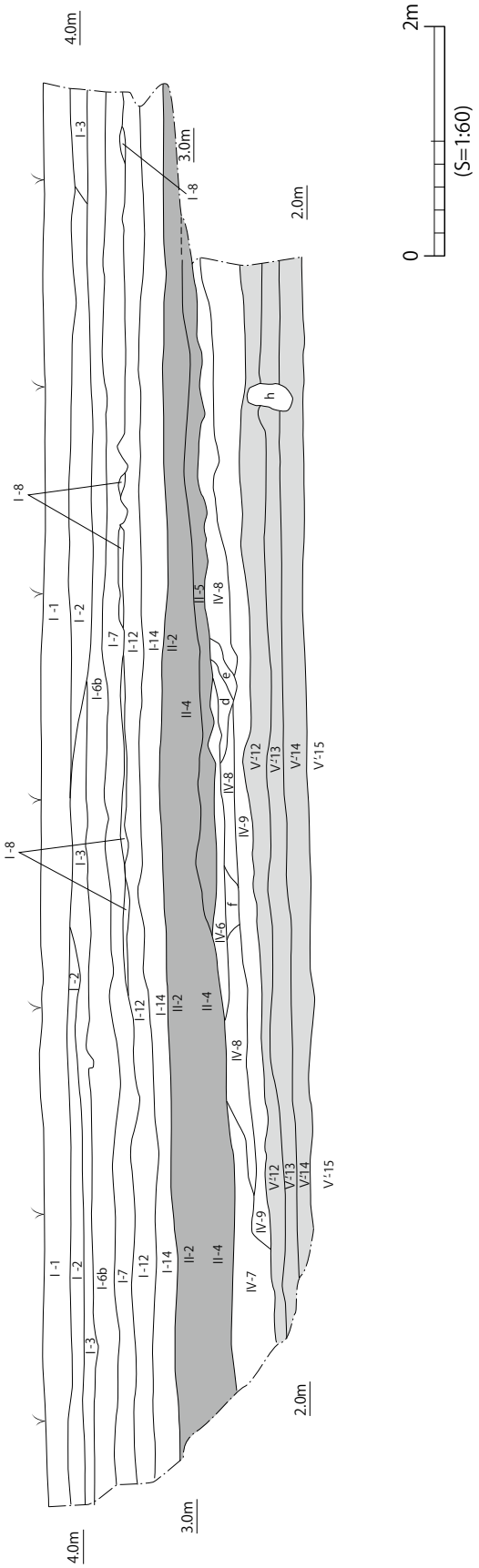


第 8 図　6 区② C・D 区土層図

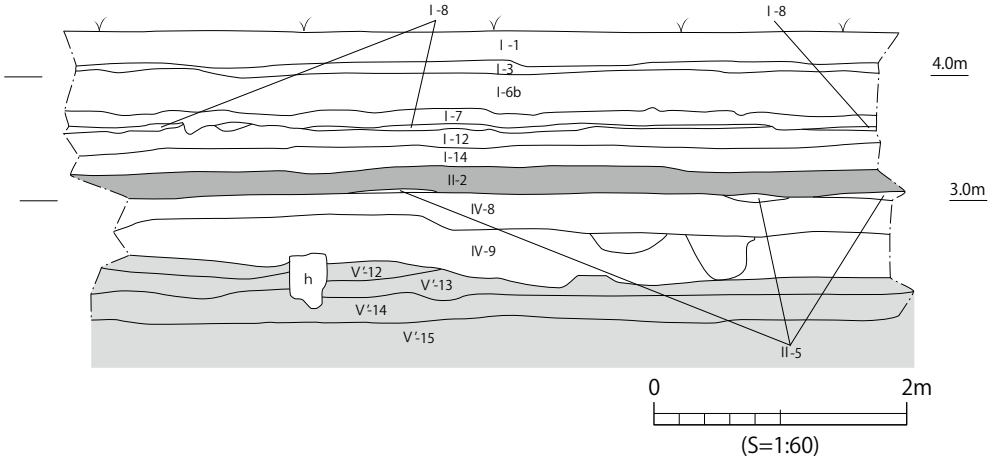
あり、面の中が凹むことから、蓋坏 A1 ～ A2a と考えられる。

B 区（第 14 図 6 ～ 10）　弥生土器と古式土師器を図示した。これらは同じ IV-4 層から出土した。6 ～ 9 は弥生土器である。6 は壺である。口縁部に 6 条の凹線文がある。V-2 様式と考えられる。7、8 は甕である。7 は櫛描直線文、8 は貝殻直線文を口縁部に施す。9 は鼓形器台である。貝殻直線文を施す。外面を赤彩する。7 ～ 9 は V-3 様式と考えられる。10 は古式土師器の甕である。口縁部は直線的に伸び、先端はやや先細りになる。口縁部下の稜は鋭く突出する。草田 5 期と考えられる。

C 区（第 14 図 11 ～ 21）　弥生土器、古式土師器、土師器、須恵器を図示した。21 以外は IV-4 層、21 は II-4 層から出土した。11 は弥生土器の鉢である。口縁部には 4 条の凹線文がある。12 ～ 16 は古式土師器である。12 ～ 14 は壺である。12 の口縁部下の稜は鋭く突出する。13 は大形の壺で、口縁部が内湾する。口縁端部は肥厚して外方へ折れる。14 は口縁部の先端が細くなる。



第 9 図　6 区②南壁 (A-A') 土層図

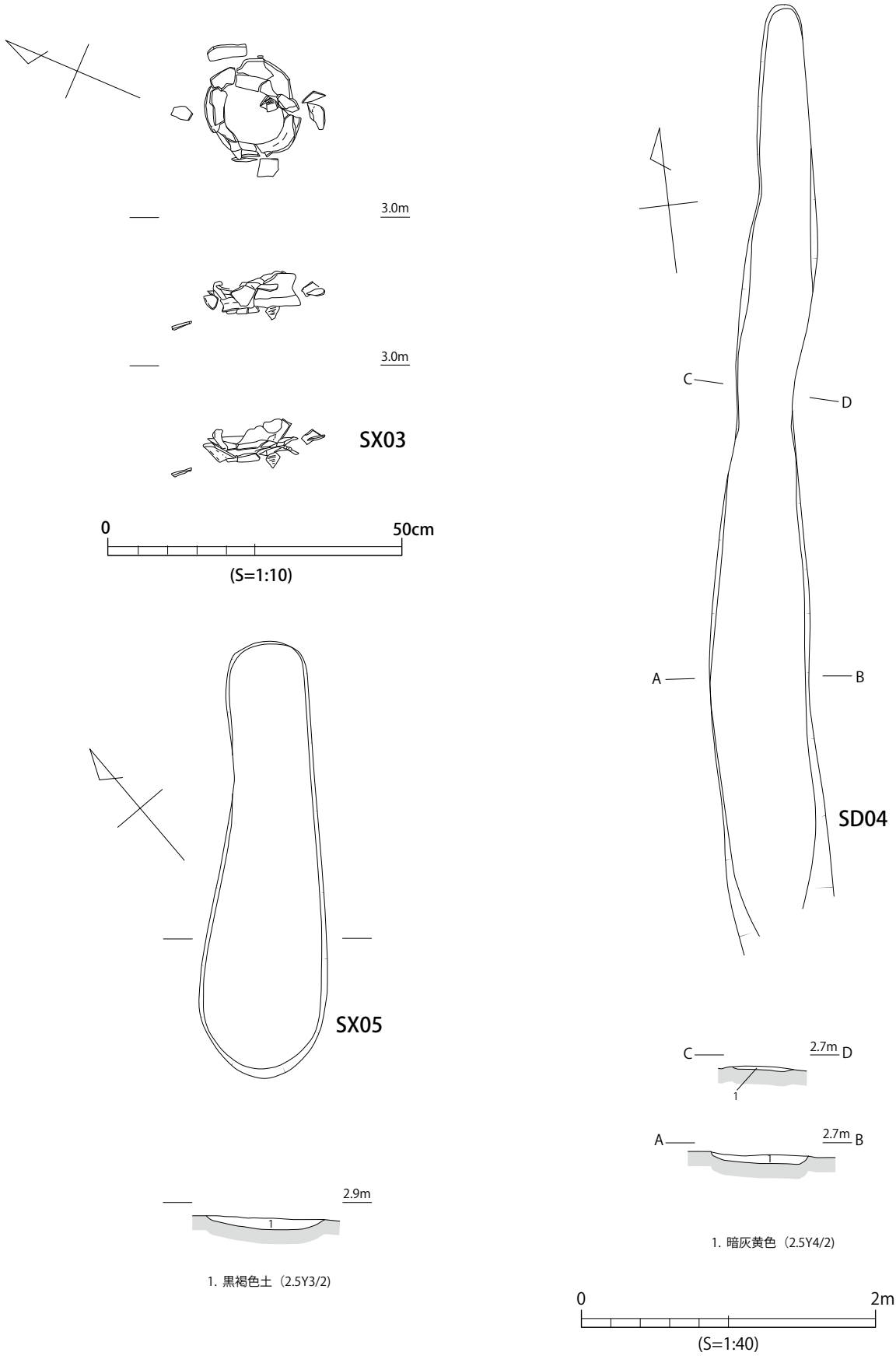


第 10 図　6 区②西壁 (B – B') 土層図

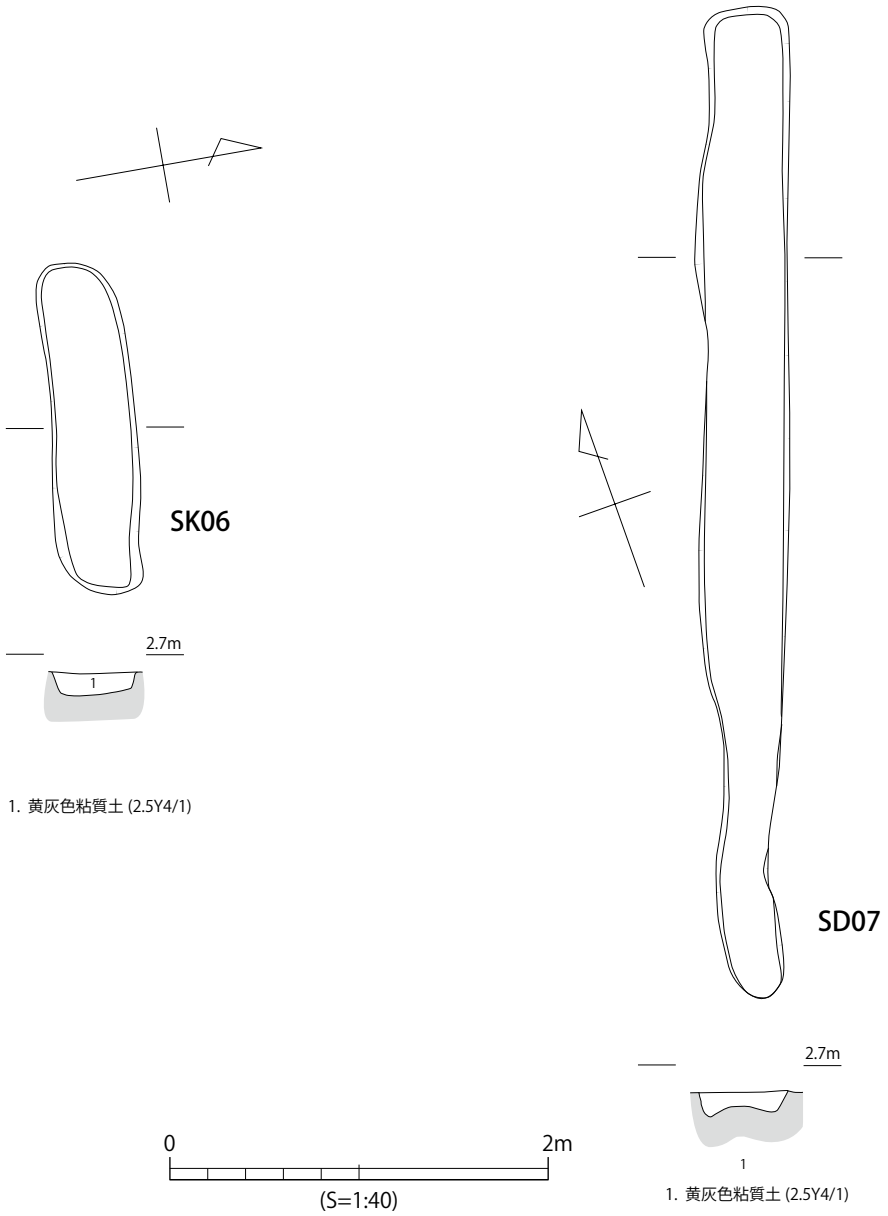
12 は草田 5 期、13 は草田 6 ～ 7 期、14 は口縁の特徴から草田 4 ～ 5 期の可能性がある。15 は高坏と判断したが、内外をヨコヘラミガキで調整することから、低脚坏の可能性がある。16 は高坏の脚部である。17 は低脚坏の底部と考えられるが、時期は不明である。18 は単純口縁の土師器の甕である。口縁部は体部からゆるやかに屈曲して口縁へ至る。19 は弥生土器の蓋と考えられる。21 は古式土師器の鉢と考えられる。内外をヘラミガキで調整する。21 は須恵器の坏身である。口縁端部にわずかな面がある。

D 区（第 14 図 22 ～ 29）　弥生土器、古式土師器、土師器を図示した。22 ～ 24 は弥生土器である。22、23 は甕である。共に貝殻直線文を口縁部に施す。22 は口縁部が短く、厚みがあることから V-2 様式、23 は V-3 様式と考えられる。24 は器台である。外面に凹線文があることから、V-2 様式と考えられる。25 ～ 27 は古式土師器である。25 は壺である。口縁部の先端が細くなり、口縁部下の稜が鋭く突出する。草田 4 ～ 5 期と考えられる。26 はわずかに体部が屈曲する高坏である。27 は鼓形器台である。稜は鋭く突出する。28 は鉢である。口縁部の内外をヨコヘラミガキで調整する。29 は土師器の高坏である。

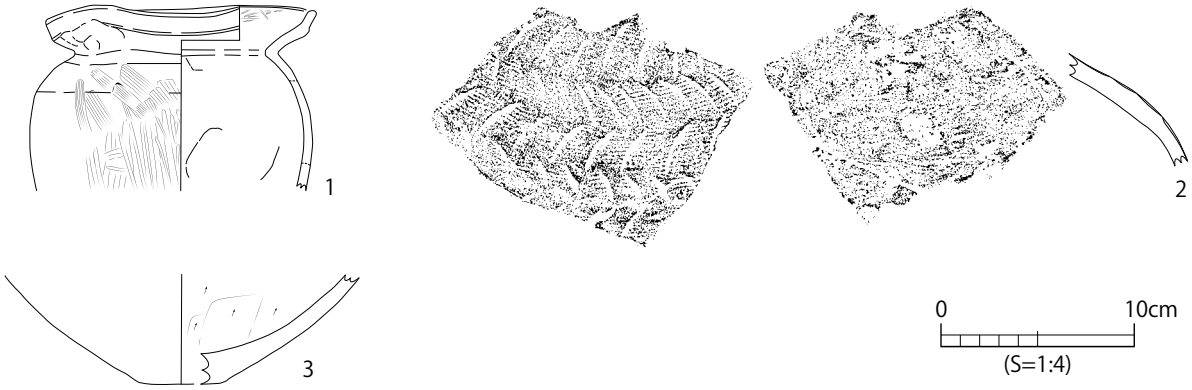
調査区出土土器（第 15・16 図）　1 ～ 6、30、31 は弥生土器である。1、2 は甕である。1 は口縁部に 8 条の凹線文がある。口縁部が厚く、口縁端部が丸いことから V-2 様式と考えられる。2 の口縁部の櫛描直線文は若干波状文風に上下する。3 は最も下層の V'-15 層から出土した壺の底部である。内外を粗いハケで調整する。弥生中期と考えられる。4、5 は鼓形器台である。4 は櫛描直線文を多数施す。内外面を赤彩する。5 は筒部に文様を施す。直線文の間に貝殻羽状文を綾杉文風に施す。6 は無頸壺の可能性がある。7 は高坏と判断したが、低脚坏の可能性がある。30 は外面に直線文と列点文を施す。直線文はヘラ状の工具を用いたと考えられる。鉢と考えられる。31 は櫛描直線文の下に刺突による羽状文を施す。5 は V-2 様式、2、4、30、31 は V-3 様式と考えられる。8 ～ 19 は古式土師器である。8 ～ 12 は甕である。口縁部は直線的に伸びるものが中心である。8 は器壁が薄く、口縁部下の稜は突出する。9 の口縁端部は先細りであるが、口縁部下の稜はあまり突出しない。10 の口縁部はアクセントがあり、わずかに外方を向く。口縁部下の稜はつまみだすように短く突出する。11 の口縁端部も外方へ屈曲する。12 は口縁端部に面がある。これらの甕の時期は、8 は草田 5 期、9 ～ 11 は草田 5 ～ 6 期、12 は草田 6 期と考えられる。13、14 は注口土器の注口部である。共に注口部が長く伸びる。15、16 は高坏である。15 はわ



第 11 図　6 区② SX03・SD04・SX05 実測図



第 12 図　6 区② SK06・SD07 実測図

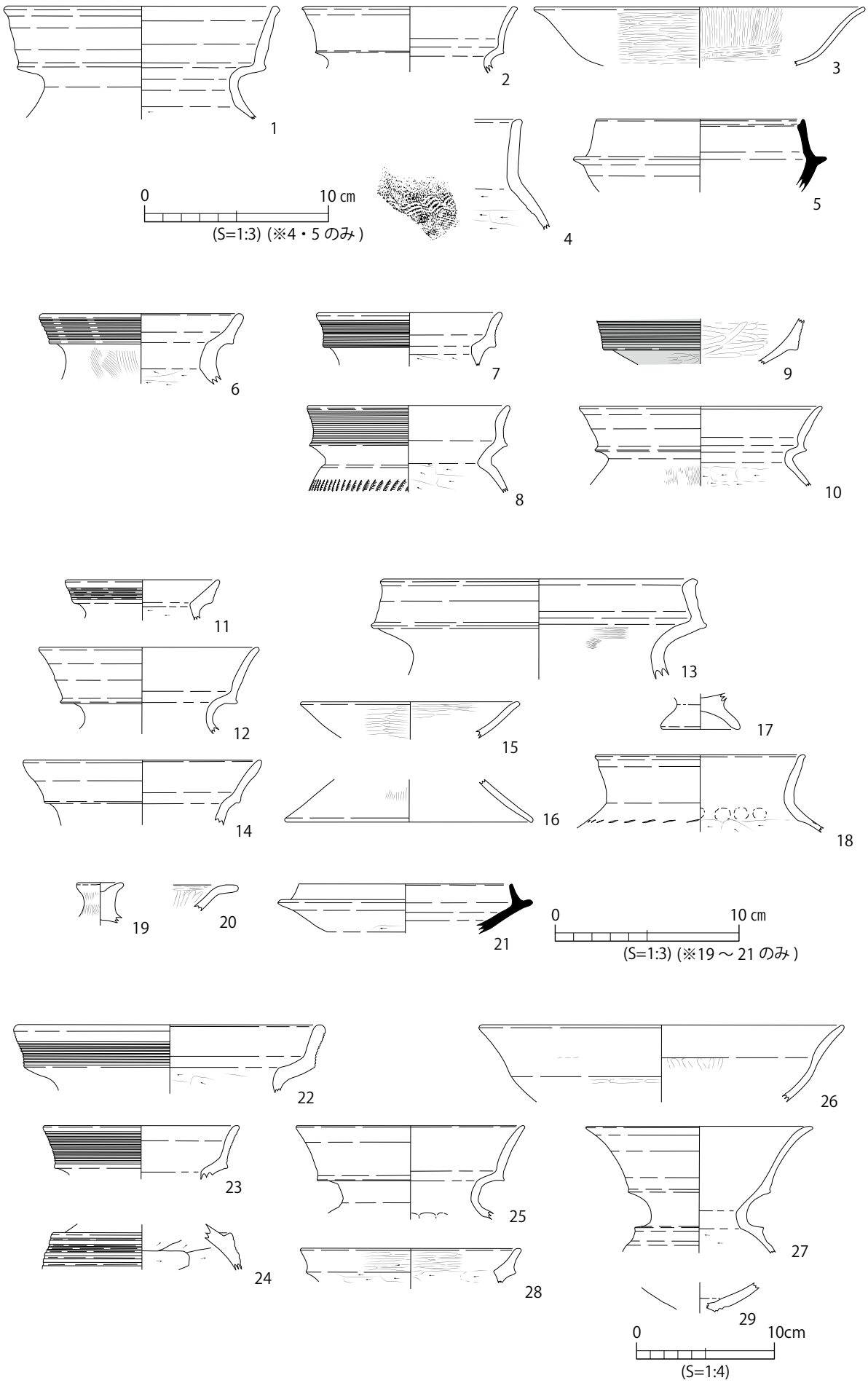


第 13 図　6 区② SX03・SD04 出土土器実測図

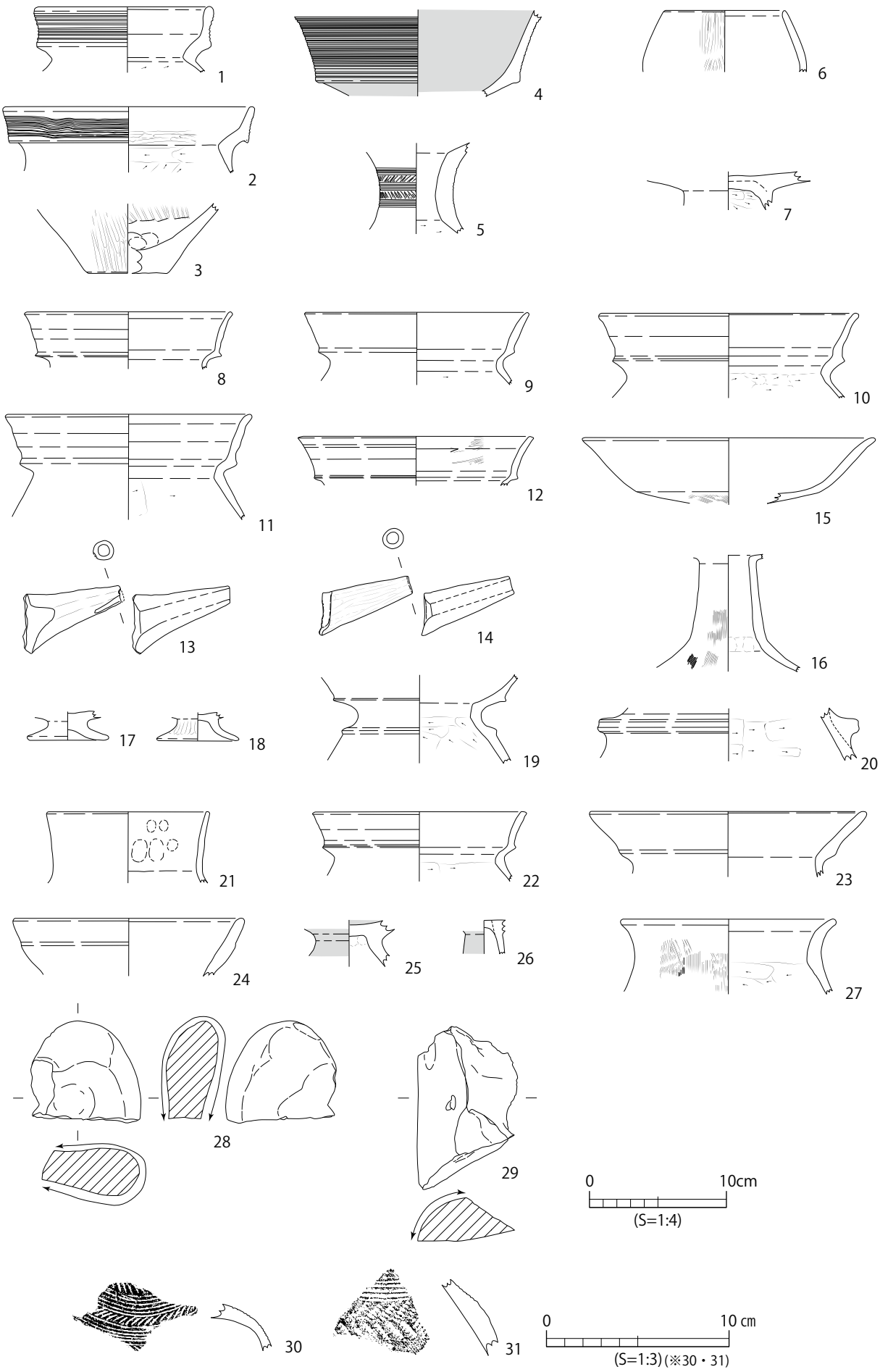
ずかに屈曲して口縁部へ至る。16 と共に草田 6 期と考えられる。17、18 は低脚坏の脚部である。共に短く屈曲する。19 は鼓形器台である。稜は鋭く突出する。20 は甑形土器の突帯の部分と考えられる。21 ～ 27 は土師器である。21 は屈曲して口縁部へ至る直口の壺と考えられる。22 ～ 24 は甕である。古式土師器 8 ～ 12 に比べ稜の突出が小さくなっている。22 は複合口縁の稜が残っているが、23、24 は形骸化が著しい。25、26 は高坏である。25 は外面と坏部内面を赤彩する。細かな胎土を用いている。27 は頸部から屈曲して口縁部に至る。奈良・平安時代の甕と考えられる。

第 16 図は須恵器や中世の土師器を図示した。1 は蓋坏である。口縁部は尖る。2 ～ 11 は奈良・平安時代の須恵器である。2 ～ 4 は坏 I 類である。2 は見込みの部分には墨痕があり、磨ったように平滑であることから、硯として使用されていたことをうかがわせる。口縁端部が外方へ折れることから、3 や 4 に先行する型式と考えられる。3 は口縁部が内湾し、わずかに肥厚する。4 は口縁部の下が沈線状にへこむ。焼成は軟質である。5 は高台付坏である。体部は直線的に伸びる。高台部は逆台形である。6、7 は皿である。6 は「ハ」字状に伸びる高台があり、体部は内湾気味に口縁部へ至る。7 は屈曲して口縁部へ至る。底部は回転糸切り後未調整である。2 ～ 7 の須恵器は、出雲 IVA ～ IVB 期に属すると考えられる。8 ～ 11 は長頸壺である。8、9 は頸部である。共に 1 条の沈線がある。10、11 は胴部下半である。高台があることから、長頸壺 II 類と考えられる。共に底部内面付近に自然釉がかかっている。11 は底部内面がつまみ状に盛り上がる。12 は甕胴部である。13 は赤彩土師器の坏である。14 ～ 16 は中世の土師器である。14 は高台付坏、15、16 は坏である。

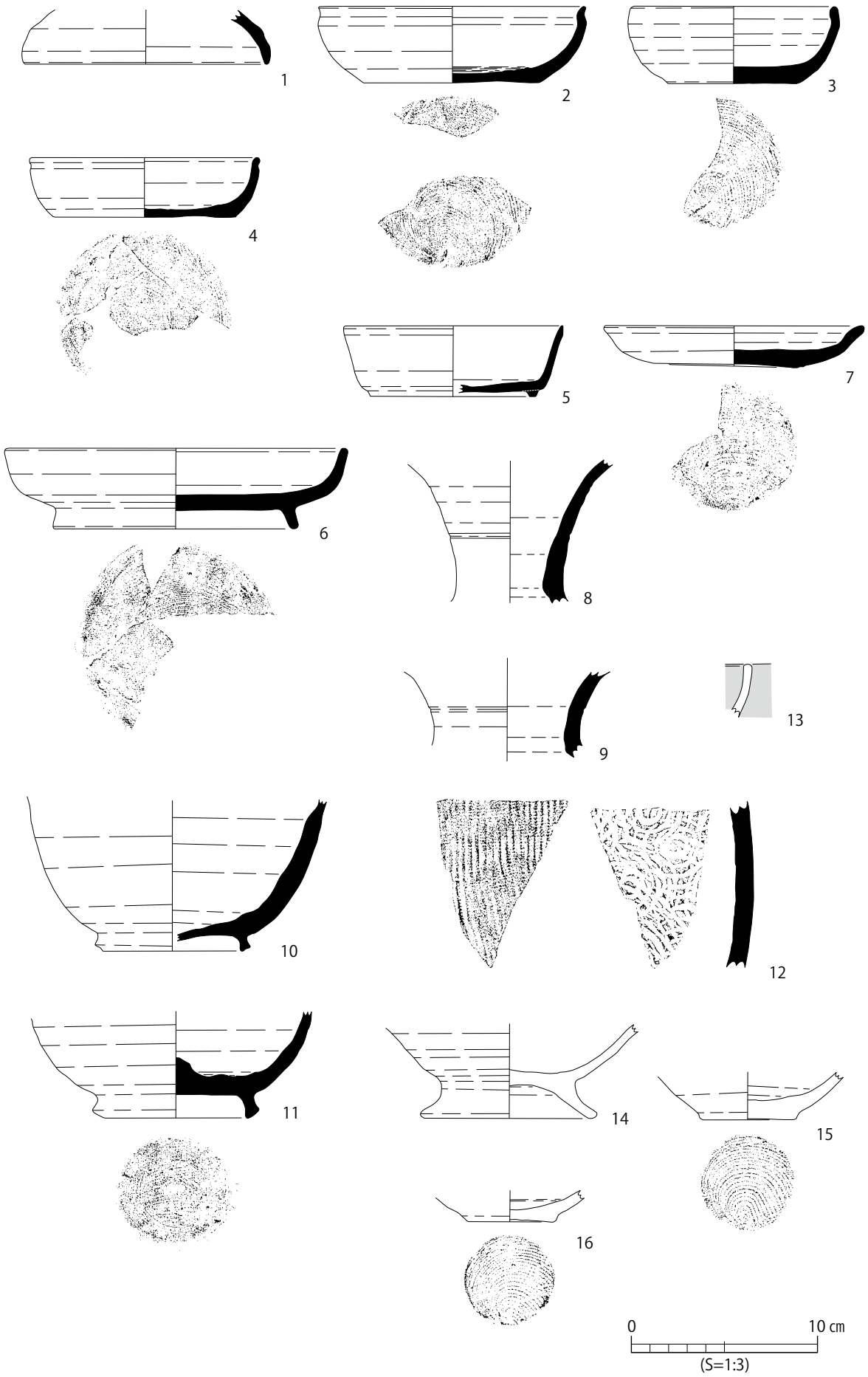
石器（第 15 図 28、29）　石器は 2 点を図示した。共に磨石である。28 は全面を使用している。29 は剥落しており一部しか残っていないが、その面を使用している。　（中川　寧）



第 14 図　6 区② A ～ D 区出土土器



第 15 図　　6 区②出土土器 1・石器



第 16 図　　6 区②出土土器 2